

2024

3

令和6年3月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻367号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあるお



公益財団法人
さわやか福祉財団

「地域助け合い基金」に どうぞご寄付ください！

能登半島地震の被災地の一日も早い復興をお祈りしています

「地域助け合い基金」では、令和6年能登半島地震を受け、石川県全域・県外被災地域・県外避難地域を特別対応地域とし、現地のニーズを踏まえながら通常のご支援枠を超えて応援いたします。

皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

- 能登半島地震復興支援のご寄付の場合は、地域を「**石川県**」とご指定ください。当財団のホームページからクレジットカードでご寄付が可能です。あるいは以下の金融機関宛にお振り込みください。金融機関の場合は、お手数ですがホームページまたは電話などにより、**石川県指定ご寄付である旨をお知らせください。**

(当財団HP「地域助け合い基金」ご寄付受付ページ)

<https://www.sawayakazaidan.or.jp/fund/tasukeai/form.php>

- 当財団からも活動支援金を「地域助け合い基金」に拠出し、石川県をはじめ被災地・被災者の皆様に応援する活動を広く支援します。

お振り込み先

■銀行振込

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金

三井住友銀行 浜松町支店 (普通) 口座番号 7859452

三菱UFJ銀行 浜松町支店 (普通) 口座番号 0095446

■郵便振替 (払込取扱票)

加入者名：公益財団法人さわやか福祉財団

口座記号番号 00110-7-709627

- * 「地域助け合い基金」では指定地域のないご寄付も常時募集しています。
- * 「地域助け合い基金」は、さわやか福祉財団が事務手数料を頂戴することはありません。
- * 「地域助け合い基金」をはじめとするさわやか福祉財団へのご寄付は、所得税・法人税等の優遇措置の対象となります。

さあ、言おう

2024年3月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

地域のネットワークで育まれる人間力

企業・社員が“共創の時代”に地域とつながる価値とは

清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

安心して楽しく暮らせる地域へ
生活支援としての

外出支援とお助け隊、つながりファーム

中島地区社会福祉協議会（岡山県倉敷市）

11 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう

外国人も日本人も地域で共生
学習支援と子ども食堂

丸亀ふくしま♡みんな de わが家（香川県丸亀市）

16 「地域助け合い基金」 助成先のご紹介／状況のご報告

20 連載 最終回 老いの暮らしを創る

私の、老いの暮らし

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

22 連載 人生100年時代を生き抜く知恵 ジェンダーの視点から 19

災害とジェンダー

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子

新しいふれあい社会づくりに向けて

26 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

27 NEWS & にゅーす

29 活動日記（抄）

㊥「地域助け合い基金」ご寄付のご案内／㊦みんなの広場／投稿募集

㊧さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内／表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと・丹 直秀

地域のネットワークで育まれる人間力 企業・社員が「共創の時代」に 地域とつながる価値とは

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

コロナ禍が落ち着き、日本企業の業績も好調で日経平均株価が過去最高値を更新、というニュースが世間をにぎわしている。景気は良いに越したことはないが、一方で、それほど豊かさを感じられないという人も多いのではないだろうか。物価は上昇し、実質賃金は目減りし、年金暮らしも大変だという悲鳴もあちこちから聞こえてくる。

少子高齢化・人口減少が進む成熟社会の日本では、従来の経済至上によるモノの豊かさから一人ひとりのこころの豊かさへのパラダイムシフトが求められている最中であり、単に活況を喜んでばかりではバブル時代と何ら変わらない。「失われた30年」を取り戻そう、という声があるが、この30年、すでに社会の枠組みも幸福への個人の価値観も大きく変わっている。

少しでも体力がついた企業は、賃上げはもちろん、将来を担う社員の人材育成に力を注ぐべきで、そのためにも地域社会とつながる絶好の機会だと強力に提案したい。

なぜなら、これからの企業の成長には、ダイバーシティの推進が不可欠であり、地域社会とのつながりやネットワークは、こうした多様性への感覚や必要な対応、消費者ニーズや地域の

諸課題を社員が自然に学び取れる場となっているからだ。方策としては、企業が組織として社会貢献活動や協働・共創事業を行う、あるいは社員を非営利団体に一定期間支援派遣する、個人のボランティア活動を応援する制度を充実する、など様々に考えられる。交じり合い連携することで、これからの時代を生き抜いていく「人間力」が養われる機会となるだろう。

たとえばこんな効果が期待される。以前委員としてまとめた冊子から改めて一部紹介する。

△従業員のボランティア活動への参加を支援する意義▽より

「リーダーとなる人材の育成」：フラットな関係の中でのリーダー・管理職としての成長

「従業員のモチベーションの向上」：自分の経験やスキルの活用場の創出・喜んでもらえる

嬉しさ等の経験・普段の業務では経験できない活動

「従業員の成長の機会の創出」：普段の業務では経験できない作業から得られるスキルの習得、

現場の雰囲気を知る機会の創出、人とのつながりの強化・これまで触れたことのない考

え方に触れることによる新たな「気づき」を得る、自由な発想力の習得

「従業員の豊かな人生の享受」：新たな生きがいの発見・人生を豊かにする経験・人との出会

い・リフレッシュ

ともすると、企業は地域を税金や助成金といったお金やモノで支援するという側面がまだ強いが、21世紀のこれからは人材の交流支援や連携事業をもっとと進めてほしい。社会的課題を共に解決する、共に進み、新たな価値を共に創り上げる。それが、自己の能力を発揮し、周囲と協調しながら自ら目標達成できる人間力ある自律型社員を育てることもなるだろう。

今こそ、働く人も企業も、そして地域も、みんなで幸せになれる社会づくりを進めていこう。



安心して楽しく暮らせる地域へ

生活支援としての 外出支援とお助け隊、つながりファーム

中島地区社会福祉協議会（岡山県倉敷市）

古き良き町並みと、四国地方につながる瀬戸大橋で知られる岡山県南部の倉敷市。約47万人が暮らすこの大都市では、62小学校区中59か所に第2層協議体が設置され、市内各地にさまざまな住民主体の活動があります。同市の中央に位置する中島地区も、協議体での話し合いから多彩な活動を創出しています。

（取材・文／東田 勉）

週2回の外出支援

「中島ボランティアアリンりん」

中島地区（中島小学校区）は、人口1万5864人で高齢化率22・6％（昨年9月末現在）。「中島」という地名は、かつて東西に分岐していた高梁川たかの間の三角州を干拓したことから来ている。もともとは農業地だったが、今は住宅地となって団地やアパート、マンションが増えた。主要道路は交通



ドライバーの山川さん（左）と利用者の黒木さん（右）

量が多いが、学区内は細い道が多くバスが走っていない。車がなければ不便な地域だ。

取材した日、一戸建て団地に隣接する住宅に住む黒木禮子さん（76歳）は、通院する病院へ送ってくれる車を待っていた。到着したのは「中島りんりん号」。中島地区社会福祉協議会の外出

支援サービス「中島ボランティアりんりん」の車だ。

黒木さんは、「施設に入所している夫の見舞いに行くときと自分の通院に利用しています。毎回タクシーで行くわけにもいかないので、ありがたいです。顔馴染みのドライバーさんが来てくれるので会話も弾みますし」と話す。運行する火曜日と金曜日に合わせて、

1週間の予定を組むという。

「申し込みは前日にしますが、ドライバーさんが持つスマホと直接連絡が取れるので、急に時間変更になっても対応してもらえて助かります」

この日のドライバーは、ボランティアの山川正明さん（76歳）。火曜日と金曜日の週2回の運行を6人のドライバーで分担しているうちの1人だ。

「車の運転が好きなので続けています。自分との会話を楽しみにしてくれる人もいるし、喜んでもらえて『ありがとう』と言われるからやめられません」

黒木さんには、独立した息子と娘がいて、それぞれごみ出しと週末の買い物を引き受けている。そのほか、近所に3家族ほど車に乗せてくれる家もあり、「皆さんのおかげで夫の介護ができています」と笑顔を見せた。

近隣地区「らんらん」と情報交換 「りんりん」立ち上げ

りんりんは、中島地区に住む高齢者の通院や買い物を助ける生活支援サービスとして2022年10月に始まった。運行の範囲は、中島小学校を起点とした半径10キロ以内。利用者は、乗降介助の必要がなく、地区内に住む65歳以上の一人暮らしまたは高齢者世帯で、子どもと同居しているも日中独居であれば利用できる。前日予約制で、利用料はガソリン代実費。ドライバーは無償のボランティアだ。

昨年4～11月の利用状況は、登録者数30人、延べ利用者数244人。行き



2022年10月4日
に行われた
りんりん出発式



先は通院が約5割、買い物約4割だ。りんりんを立ち上げた同地区社協の細川勝則会長（82歳）は、取り組みの契機をこう語る。

中島地区

の第2層協

議体（呼称

・小地域ケ

ア会議）の

構成員は、

民生委員、

愛育委員、

栄養改善協

議会、地区

社協、自治

会長、老人

クラブ、特

養施設長、

保健師、市

社協（S.C）

等だ。事務

局は倉敷西高齢者支援センターに置か

れ、定期的に中島地区の高齢者の課題

を話し合っている。外出支援は、市内

の玉島乙島地区が先んじて「乙島ボラ

ンティアらんらん」を行っていたので、

「この地区では、昔からコミュニティ協議会を月1回開催しています。その場で、ある町内から、外出に困る高齢者が増えているという意見が出たため、第2層協議体のテーマの一つに取り上げたのです。すると、倉敷西高齢者支援センター（地域包括支援センター）にもそういう意見が来ていることが分かり、取り組みを始めることになりました」



左から、中島地区社協の山下さん、細川会長、根谷さん

その取り組みを学んだ。

「らんらん」は、走るという意味の英語「run」を意識した呼び名だ。それにならったりんりんは、鈴の音をイメージして名付けた。地域からリンリンと鈴を鳴らすように、気軽に呼んでもらおうという思いが込められている。

住民の活動を包括もサポート

りんりんをスタートさせるまで、協議体では1年かけて仲間づくり、仕組みづくりをした。事務局メンバーである同地区社協の板谷辰夫さん（70歳）が経緯を教えてくれた。

事業運営資金は、地区社協と学区コミュニティ協議会からの助成金、社会福祉事業に理解のある地域企業からの助成金を受けている。立ち上げ時には細川会長が地区民生委員会の会長だったことから、民生委員からの寄付もあった。車は細川会長が複数台所有して

いたので、そのうちの1台を使用することになった。

登録の窓口は、要支援・要介護の情報を把握している倉敷西高齢者支援センターが行う。利用希望者から連絡があると、センターの職員が訪問してヒアリングを実施。そして、もしりんりんのサービス内容に合わない場合でも、ほかに支援できる

内容に合わない場合でも、ほかに支援できる



倉敷西高齢者支援センターの職員さんたち



りんりん立ち上げの作戦会議

サービスがないか探すことができるのは、高齢者支援センターが関わっているメリットだ。要介護の人からりんりんへの利用希望があったときには、断るだけでなく介護タクシー等について案内している。場合によってケアマネに話をつなぐこともあるという。

利用が決まると、受付担当の山下亮平さん（78歳）と福成光芳さん（69歳）が情報を共有。専用のスマホで、受付内容をドライバーに伝える。ドライバーは、民生委員などいろいろな人から住民に声をかけてもらい、6人が「いいよ」と引き受けてくれた。もしもの事故には、移動支援で使われるボランティア保険に加入することで対応でき

た。ドライバーは運転講習を受けて出発の日を迎えた。

④ ちよつとした困りごとをお手伝い 「中島地区お助け隊」

19年7月から始まった「中島地区お助け隊」は、協議体やその作業部会を通して、住民目線での課題検討を重ねて実現した、住民同士の助け合い活動だ。

「協議体で住民にアンケートを実施したら、ごみ出しや草取りに困っているという声が上がったのです。それならお互いに助け合おうと、他地区を視察したりして仕組みづくりをしました」と細川会長。

ごみ出し1回100円、草取り1時間300円など、高齢者が地域の中で安心して暮らせるよう、隊員が「ちよつとした困りごと」を有償でお手伝いするお助け隊。隊員は、同地区在住で

いやりがある人。23年12月現在、個人27人と2団体の登録隊員が活躍している。

隊員募集チラシを地区で全戸配布したところ、これまでに小学生の親子が「やってみたい！」と隊員に加わってくれたこともあって、学校が休みのときに草取りなどの活動をしてきていた。

利用者は、中島地区に在住する70歳以上の人。一人暮らしか高齢者世帯が対象だが、その他も必要に応じて相談を受け付ける。問い合わせや申し込みは、りんりんと同じ倉敷西高齢者支援センターだ。

23年度の実施件数は、4〜9月まで延べ319件。内容はごみ出しが一番多く、次に草取りが続く。隊員にと



お助け隊の活動の様子（草取り）

っては「できること」で貢献する大切な場であり、利用者にとってちよつとした困りごとが身近な人とのつながりで解決する、暮らしに寄り添った活動だ。謝金はすべて隊員へ支払われる。有償ボランティアなので、お互いに気兼ねのない関係性が魅力だ。

⑤ すべての人の交流拠点 「つながりファーム中島」

数年前、中島地区の民生委員だった人から、「自分の所有する土地を提供するので、地域に役立ててほしい」との申し出があり、協議体で話し合われて創出されたのが「つながりファーム中島」だ。話し合いの中で、「野菜などを育てるだけでなく、何らかの交流



子どもたちによるお礼の草取り



つながりファームでの焼き芋イベント

の場にしたい」という声が上がると、憩いの場として活用されることになった。ファームには、チラシを見た人や地区社協メンバーが声をかけた人たち、学童保育の子どもたちなどが集まってきた。野菜と一緒に育て、交流を楽しむ。同地区には、18年7月の西日本豪雨によって他地区で被災した人々も移り住んでいるが、ファームはそういった

人たちの楽しみにもなっている。さらに、地元の就労継続支援B型事業所に「いろいろ」もファームの仲間だ。土をならしたり、不用品を撤去したり道具置き場を作るなど、地域住民とアイデアを出し合って作業することは事業所利用者の生活訓練にもなるという。「年に一度は、この土地で催し物などの福祉活動をやりましょうと皆で話し合い、一昨年、昨年と中島小学校の子どもたちとの芋掘り・焼き芋大会も開きました。ずいぶん好評で喜ばれています」と細川会長。子どもたちは、お礼にファームの草取りをしてくれた。これからも、この場所で世代や立場を超えた豊かなつながりが生まれることを期待したい。

課題よりも、できることや可能性に目を向けて

第2層協議体が機能し、さまざまな活動が生まれた中島地区。今後はどの

ように進んでいくのだろう。同市社協の第1層SC松本和徳さんは、これからの展望をこう語る。

「中島地区は、高齢化率は市内でも高いほうではありませんが、高齢者が多い団地や若い世代の住宅が混在しています。誰もが地域の活動に参加するには、接点やきっかけが必要なので、課題よりもできることや可能性に目を向けて、年代や属性の垣根を超えた地域の連携が広がるように応援していきたいです」

りりん事務局の板谷さんは、防災面を強化するのが今後のテーマだ。

「今、協体で災害危険マップを作っています、これを個別避難計画の作



倉敷市社協の第1層SC、松本さん

成にまで広げていきたい」

りりん受付の山下さんは、西日本豪雨の際、細川会長から誘われて全国から集まったボランティアと一緒に活動したのが地域活動に参加するきっかけになった。

「中島地区は、みんなの仲の良さ、まとまりの良さが自慢です」と太鼓判を押す。

倉敷西高齢者支援センターの池田さおりさんと三宅利絵子さんも、「中島地区は会長さんをはじめ前向きな方が多いので、私たちも一緒にこの勢いを未来へ向けて継承していきたい」と熱っぽく語ってくれた。

印象的だったのは、細川会長が「協体的なみんなのおかげ」と言い、皆が「前向きな会長が引っ張ってくれるおかげ」と互いをたたえ合っていたことだ。次々に住民主体の活動を充実さ

せてきた原動力となっているのは、人と人の信頼の深さだと感じた。中島地区の皆さんのいきいきとした活動は、全国各地で参考にももらえるだろう。



中島地区社会福祉協議会

2004年に設立された、中島小学校区を対象とする地区社会福祉協議会。主な活動は、①住民同士の支え合い「中島地区お助け隊」、②外出支援「中島ボランティアりりん」、③交流拠点「つながりファーム中島」。ほかに、地区社協だより発行や夏休みラジオ体操推進などを行っている。

- 連絡先／〒710-0834 倉敷市笹沖180番地
- くらしき健康福祉プラザ
- 倉敷市社会福祉協議会
- 電話 086-434-3301
- FAX 086-434-3357

いいきき わくわく

子どもと一緒に 地域で輝こう



外国人も日本人も地域で共生 学習支援と子ども食堂

丸亀ふくしま♡みんなdeわが家（香川県丸亀市）

外国籍の子どもたちが放課後に集まってくる家があります。にぎやかにおしゃべりしながら宿題をして、温かい夕食を食べる子どもたちと、支援する人たちを取材しました。

（取材・文／東田 勉）

● くつろげる居場所と宿題

「ただいま」「ただいま」

元気なあいさつと同時に、丸亀市福島町にある一軒家の玄関から、学校帰りの子どもたちが入ってくる。築60年のこの家の下駄箱は、子どもたちの靴でいっぱいになった。現在、ここを訪れる子どもは15人ほど。この日、放課後に集まったのは、

ペルー国籍の子2人、フイリピン国籍の子7人だ

が、もちろん日本人の子どももウエルカムだ。学校の友だちを誘って来ることもあるので、提供する夕食は多めに用意してある。

ここは、ボランティア団体「香川まるがめ子どもにほんごひろば（以下、にほんごひろば）」が運営する居場所「丸亀ふくしま♡みんなdeわが家



「丸亀ふくしま♡みんなdeわが家」
入り口には楽しげな看板

ボランティアに見守られながら宿題をする子どもたち



（以下、わが家）。地域住民と丸亀市に住む外国人の交流拠点だ。丸亀港に近いこの町は、造船

関係の仕事に就いている

外国人が多く暮らす。同

市の人口は、今年1月現

在で約10万8000人。

うち外国籍の住民は約2

300人（2023年4

月現在）で、その8割が

中国、フィリピン、ペル

ー、ベトナム国籍だ。

ここでは、20年11月か

ら外国籍の子どもた

ちの「放課後寺子屋

教室」が開催されて

きた。無料で夕食を

提供する子ども食堂

も開催するようにな

ったのは、22年6月

から。毎週月曜日と

木曜日の16〜17時が寺子屋教室、17時から子ども食堂の時間だ。

「わが家」のボランティアスタッフは15人ほど。

資格は必要なく、子どもが好きで、寄り添った活

動ができる人なら大歓迎だ。この日、学習支援の

ボランティアをしていたのは、米国からのインタ

ーンシップ帰りで現在求職活動中の山下純さん

と、数年前に小学校教師を定年退職した田中志代

美さん。

「1時間では宿題を済ませるだけで精いっぱい

ですが、次の日学校に行くのがイヤにならないよう

に、宿題だけはやろうねと声をかけています」と

田中さん。

● イベントよりも日々の支援を

香川県庁の職員だった安藤州一さん（74歳）は、

国際課に1年勤務した後、香川県国際交流協会に

移って国際交流事業の企画や運営に携わっていた。

その頃、「活動が実際に外国の人の役に立ってい

るのだろうか。むしろ、その場に来ることさえで



「にほんごひろば」会長の安藤さん

の対象は、親と一緒に外国から来たか、日本で生まれた外国籍の子どもたち。日常会話はできても、学校の授業となると十分理解できない子を集めてボランティアたちが勉強を教え始めた。

「にほんごひろば」には長らく拠点がなく、地元にある市のコミュニティセンターで活動が続いていた。しかし、公的施設はみんながくつろげる居場所になりにくい。そこで安藤さんは、活動のために20年11月、空き家だったこの家を自治会長の紹介で自費で購入、「わが家」が誕生した。

「コミュニティセンターは外国の人には敷居が高いようですし、一軒家のほうが活動の自由度も増

きない人のほうが支援を求めているのでは」と葛藤を抱えていたという。そして、退職を機に15年から始めたのが、「にほんごひろば」だ。活動

します。「自分たちの家」という安心感も持てますので購入しました」と、淡々と語る安藤さんだが、活動のために私財をなげうつ熱意には敬服するしかない。

●「いただきます！」みんなで夕食タイム

17時に近づくと、台所からいい匂いが漂ってきた。調理をしているのは、数人のボランティア。まとめ役の佐藤昌子さんは、「NPO法人つながる・つむぐ・海と空」のメンバーだ。丸亀市で高齢者支援を行う「海と空」は、フードバンクや高齢者への食事提供など、食の支援に力を入れている。

「ここでの夕食作りには、『わが家』のメンバーさんの紹介で協力することになりました。困っている人を支援する団体同士も、助け合うのが大事だと思って」。調理師資格を持



食事はボランティアが腕によりをかけて調理



(左) 温かい食事を
みんなで囲んで食べる
(下) この日の夕食



ち、NPOでも活動する佐藤さんは「わが家」の強い味方だ。一緒に調理していたフィリピン人の女性は、小学一年生の双子と5年生の子が「わが家」に来ているという。「子ども様子が分かるので私も来ています。日本語や日本語が学べるのもありがたいです」「ご飯ができたよー」という呼びかけで、子どもたちは宿題を片付け始めた。学習支援ボランティアと子どもたちは二間続きの居間で、調理ボランティアの皆さんは台所で、「いた

だきますよ！」と声をそろえた。

この日のメニューは、おにぎり、鶏の唐揚げ、ブロッコリーとトマト、おすまし。みんなおいしそうに食べながら、おしゃべりが始まった。

ペルー出身のビダル・ダマイラさんは、小学5年生。「ここはどうですか？」とたずねてみると、「みんなといっぱいしゃべれて楽しいです。学校のお友だちと一緒に来ているから」と、2人の子のほうを見ながら教えてくれた。横には小さな男の子。ダマイラさんの未就学の弟、マテオくん。ダマイラさんたちの姉・キアラさんは、初期の「にほんごひろば」に来ていた。今は岡山の大学で学んでいるようだ。

「キアラはコミュニケーション能力の高い子で、中高とバレエ部のキャプテンをしながら塾に通って、勉強も頑張りました。それで、指定校推薦で進学したのです」とキアラさんの母親ニナさん。やがて、「おかわりありますか?」「お肉が欲しい!」「僕はおにぎり」と子どもたちの声が響いた。

● 外国人も日本人も地域で一緒に

取材があった翌週の日曜日、安藤さんたちは近くの私立高校の生徒たちとハイキングをしながらごみ拾いをするのだという。以前「にほんごひろば」に来ていて高校生になった子たちに呼びかけに行く、多世代・多国籍のボランティア活動だ。

「ここを卒業した子どもたちにも、『困ったことがあれば相談に乗るよ』という、つながりを維持するための活動です。成長した外国籍の子どもたちも、いずれ人生の選択をしなければなりません。そのサポートもしていきたいのです」と安藤さん。昨年6月には、子どもたちと市内の清掃活動を、10月にはフットサル大会を行った。どちらも多くのボランティアが協力し、国際交流にも役立って地元紙にも取り上げられた。

公務員時代の安藤さんの経験は、居場所にイベントにと生かされ、周囲の協力を得て広がっている。

「外国人の子どもたちだけの閉ざされた居場所

なく、こういった活動を通じて外国人も日本人も交流し、共生していくことが大事です。これからは、企業や他の社会福祉団体とも協働していきたい」（安藤さん）

取材に訪れたとき、市役所の隣にある市民交流活動センターの市民展示コーナーでは、「にほんごひろば」主催の写真展「丸亀の子どもたち」が開催されていた。

「わが家」に通う外国籍の子どもたちが、インスタントカメラで互いの日常を撮り合った写真だ。写っている子どもたちは、すっかり地域に溶け込み、自然体の笑顔にあふれていた。

この子たちの多くは、日本で生まれている。そして、多くがこの先も日本で生きていこうと考えているという。国籍にかかわらず、困っていることがあるなら互いに手を差し伸べて、共に生きていければ皆が幸せを実感できるのではないだろうか。



市民交流活動センターで開かれた写真展

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、居住環境改善のため除草や伐採を行う活動、全世代のための子ども食堂、アルコール依存症の人とその家族を支援する活動を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

埼玉県川島町

生活弱者の支援活動 コツコツと地道に地元で

新田ボランティアお助け隊

助成金額 13万5000円

新田ボランティアお助け隊は、2021年設立。「吹塚新田」行政区内の生活弱者を支援するため、社会福祉協議会や民生委員と情報交換しながら、高齢者等の敷地内の除

草・伐採を行い居住環境を改善、ごみをクリーンセンターに運ぶなどの活動をしています。

川島町は雑草や竹林の繁茂がさまざま、のこぎりや鎌では伐採に対応しきれないため、個人所有のチェーンソー等を借りて作業しています。また、伐採した草木の処分費用もかかりますが、行政には現状、このような活動への助成等の仕組みはなく、今後の課題とのこと。本基金の助成金は、充電式丸鋸のこと充電式チェーンソーの購入に充てていただきました。

活動の勢い、資金など、さまざまな閉塞感の中、「助成



購入したチェーンソー等を使用して行った作業の様子



はっぴいまま子ども食堂では大きい子も小さい子も一緒に遊ぶ

を受けられたことは経済的にもありがたいことですが、『俺たちのやっていることが社会に認められた』という安堵がより強いです。『俺たちのやっていることは間違いないんだ！』と会員が考えることは、会のモチベーションの維持に大きく貢献しました」「これを機会に、今後もコツコツと地道に地元で活動していきたい。そして行政にも粘り強く働きかけて、地域助け合いの輪を他地区にも広げていく努力をします」と報告を下さいました。

神奈川県川崎市

食事を提供し、みんなを応援 全世代が笑顔になれる子ども食堂

はっぴいまま子ども食堂

助成金額 15万円

小さな子どもと親、高齢者など地域の人たちが集う場所をつくりたいと2022年に活動を始めたはっぴいまま子ども食堂。一人ひとりに寄り添い、日々の食事作りなどを頑張る人の役に立ち、子どもたちに栄養のある食事を提供して、心も育める、そばに子どもがいて高齢者が元気になれる、そんな場所にしたと取り組んでいます。

本基金の助成金は、ガス炊飯器、保温器、床用シートの購入と、ガス管増設工事等に活用していただきました。

「子どもたちを見ながら食事ができるのは本当にうれしい」と毎回訪れる高齢者。子どもたちはどんどん友だちを誘ってきてみんなで食事をし、大人も子どももゲームをしたりし

て大騒ぎ。小さな子どもがいるお母さんも「唯一休憩できる日です」というのはびびりまま子ども食堂。宿題を終わらせ、大きい子が小さい子の面倒を見る様子も普通に見られるそうです。

「①食事作り②宿題がやってある。これが何よりもお母さんたちが喜ぶことだと思います」「お年寄りはずいぶん声が聞けるのを喜ぶ方が多いです。子どもも、おじいちゃんおばあちゃんに折り紙を教わったり、一緒に遊んだりが大好きです。もう少し余裕が出てきたら人形劇団を呼んだりしたいと思っています」と、これからの抱負を寄せてくださいました。

奈良県奈良市

アルコール依存症の人とその家族に 居場所から支援の手を

ふあみりーすまいる

助成金額 15万円

アルコール依存症の人とその家族の問題に取り組んでいる、ふあみりーすまいる。依存症の人による暴言・暴力で

家族がづらい思いをし、いろいろな問題に巻き込まれるなど、どれほど悪影響を受けるかを知るスタッフが、家族が一時的にしのげる居場所を提供し支援しています。

居場所となる家の提供を受けたものの、築年数が経っていることから改修が必要な状態でした。このため

本基金の助成金は、水回り修理や畳の入れ替え費用、布団セットや中古ベッドの購入等に活用していただきました。

改修を終えた居場所では、警察から避難するように助言されたなどサポートを必要とする家族を受け入れました。

話を聞きながら助言を行い、依存症の本人とも冷静に話ができるようになり、専門病院につなげた例もあるということです。さらに、今回の助成をきっかけに奈良市社会福祉協議会からも利用希望者の連絡をもらったほか、京都府木津川市の活動者ともつながりができ、木津川市の地域包括支援センター加茂支所と共催で「依存症相談窓口」開設に



中古ベッド等がそろった居場所

「地域助け合い基金」 状況のご報告

至ったそつです。

報告では、「周囲の理解がないと依存症者とその家族は孤立し、治療への道が閉ざされます」「地域の支援者に依

存症という病気について理解を深めていただき、困っている依存症者や家族を見つけて私たちにつなげていただきました」と訴えています。

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。

2月15日までの状況をご報告いたします。

（2月15日 当財団ホームページ開示時点）

◎寄付受付額

220件 1億7353万7836円

このうち当財団より1億4162万1000円を供出

◎助成実行額

1074件 1億6690万9064円

地域助け合い基金は、地域共生社会の実現を目指し、助け合い活動のスタート・継続を支援しています。引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願ひ申し上げます。

（事務局長・内田）

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、左のコードもご利用ください！

基金に関するご意見・お問合せ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

老いの暮らしを創る

私の、老いの暮らし

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

終の棲み家を有料老人ホームと決め施設で暮らし始めてから、あと数カ月で丸2年になります。80代で未知の領域に踏み込んだ当初は不安や戸惑いがありましたが、自分で決めたこと。全てを受け入れ身の丈に合った老いの暮らしをつくり上げようと歩んできました。

「高齢者だけで暮らすなんて、ナンカ変じゃない？」と言った後輩がいます。入居前、私もそう考えたことがあります。確かにホームは60代後半から70代、80代、90代と、まさに高齢者軍団。若いのはスタッフのみです。しかし入居者の多くが施設以外のそれまでの人間関係を保っており、勉強や趣味で出かけています。社会の出来事にも実に敏感。レスト

ランやお風呂でそうした話題で盛り上がっては「話がすぐ通じるからラクねえ」と笑いこぼるものも、同時代を過ごしてきたからこそ安心感です。

困ったことや迷っていることなど、少し声を上げれば必要な情報があつという間に届きます。自分とは異なる世界に身を置いてきた人たちの経験や知識は、困り事解決の大きな力になり、「お醤油、貸して」と電話すれば、すぐ持ってきてくれます。助けたり、助けられたり。まさに施設という小さな地域社会。お互いさまの精神が根付いています。

一方、高齢者だけの暮らしに身を置いていると、考えさせられることも多々あります。生活必需品が古くなったり壊れかけたり、ま





た衣類にほつれや汚れがあっても「まあ、いいわ。どうせこの先そんなに長く生きるわけではないのだから」と、冗談とはいえ投げやり的に言う人がかなりいます。今後の人生がどうであろうとも、最後まで身の回りを整え、その場しのぎの日々にならないよう心しなければと言いかせています。

また当然ながら、人の病や死に触れることが多いのも事実です。元気だった人が次第に生命力をなくしていく。病院通いが増えしていく。姿を見かけなくなったり思っていたら「亡くなったのよ」ということを聞くことがあります。それは決して希有なことではなく、日常の一コマとしてあるのだなとわかりました。それだけに一層、一日一日の大事さを実感するのです。

私が施設に入居したということを知った評論家の樋口恵子さんから「貴女はジャーナリズムに身を置いて来た人で最初に施設の暮ら

しを始めた人よ。施設がどんな所か、そこで暮らしがどんなものであるのか、きちんと書き残しておきなさい。それが貴女の責務ですよ」と言われました。確かに世間が考える施設の暮らしと、私が実感するそれとはあまりに違いすぎます。先日も遊びに来た友人が「施設に入ったって聞くと、何だかもう遠い人になったような気がして気軽に来られなかったのよ」と言いました。多様な施設の暮らしがあるにもかかわらず、施設Ⅱ要介護という社会通念が定着しているような現状を考えると、その実態をもっと発信し情報提供していく必要があるでしょう。樋口さんのメッセージが心に残っています。これからも社会へ向ける目を失うことなく、私自身の暮らしに磨きをかけていこうと思います。

今月で私の担当は、お終い。

長いこと読んで下さってありがとうございます。また。

(二六)



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退任後も高齢者問題の第一人者として活躍中。

災害とジェンダー

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子



(そでい たかこ)

お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学客員教授、一般社団法人シニア社会学会会長、一般社団法人コミュニケーションネットワーク協会会長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会副理事長。専門は老年学、家族社会学、女性学。主な著書に『変わる家族 変わらない絆』『高齢者は社会的弱者なのか』（以上ミネルヴァ書房）、『女の活路 男の末路』（中央法規出版）、など多数。

地震や津波による被害には、男女で違いがある。何よりも体力の差が、被害の大きさに関係している。地震による家屋の倒壊や倒れてきた家具の下敷きになった際、男性に比べて体力の劣る女性は自力で脱出することが難しい。能登半島地震でも、目の前で冷たくなっていく妻や娘を前にして、何もできないことの悔しさを語る男性の姿には胸を打たれた。

東日本大震災による津波で逃げ遅れたのは、圧倒的に足の遅い高齢者だが、なかでも高齢女性が

多いような気がする。これは、高齢者に女性が圧倒的に多いという事実の反映でもある。

震災後の避難所生活においても、女性は男性とは異なる問題に直面する。避難所の運営は、自治会長や区長など地域社会のリーダーに任されるのが普通だが、そうした人たちの多くは高齢の男性だ。その結果、女性への配慮に欠けることが珍しくない。

多くの人が雑魚寝状態の公民館や体育館では、他人の目を気にしながら着替えをしなくてはなら

ない。なかには、セクハラに近い行為もあったと伝えられる。

こうした状況を改善するために、東日本大震災以後は、避難所におけるプライバシーを確保するための取り組みが進んでいる。段ボールの衝立で区切ったり、家族ごとに暮らせるテントを設置するといった試みもみられる。

避難所では、女性の下着が盗まれることもあるので、洗濯物を干すこともためらわれる。能登半島地震の後では、まとめて洗濯を引き受ける洗濯ボランティアが登場した。

震災直後の救援物資は、水、食料、衣類などに集中するため、生理用品や化粧品が届けられるまでには、かなりの時間がかかる。

私は、阪神・淡路大震災の1年後くらいに神戸市を訪れる機会があった。1月という寒い時期の避難所生活では、肌荒れやひび割れに悩まされたという女性の話を耳にした。

震災は家族の関係にも影響を及ぼす。お互いに

助け合って生活の再建に励むというケースがある一方、ストレス発散のため、酒におぼれて妻に暴力を振るう夫もみられた。

阪神・淡路大震災の1995年頃には、モータース・サラリーマンが少なくなかった。自分たちの生活の目途もたっていないのに、早々に会社に出かけてしまう夫に不信の念を抱き離婚に至ったという、「震災離婚」も報じられていた。

災害時において女性は支援の対象であるだけでなく、支援者としても大きな役割を果たす。医療チームには女性の医師や看護師が加わっているし、心のケアを行ううえで、女性のカウンセラーや臨床心理士が活躍している。最近では、地域の防災計画の策定に女性が参画するケースも増えている。今のところ、問題は顕在化していないが、災害時にLGBTQの人たちが直面する問題にも注目する必要があるだろう。近年、増加している大規模な自然災害は、社会におけるジェンダー格差をあぶりだす契機でもある。

「地域助け合い基金」で 地域共生社会をつくりましょう

皆様からのご寄付をお待ちしています

「地域助け合い基金」は、地域共生社会実現のため、地域における住民主体の助け合い活動を支援する基金です。日本国内の活動が対象で、高齢者、子ども、障がい者、生活困窮者、外国人ほか、分野は問いません。また、支援したい自治体をご指定いただくことができ、能登半島地震の復興支援としてもご寄付いただけます（関連→表紙裏）。

皆様のご寄付をどうぞよろしくお願い申し上げます。

<ご寄付の方法>

(1) 銀行振込・郵便振替によるご寄付

※お振り込み先は、裏表紙をご覧ください。

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

※ゆうちょ銀行（郵便局）の場合は、通信欄に、ご指定がある場合の自治体名と、一言応援コメントなどをご記入ください。また、払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

(2) クレジットカードによるご寄付

当財団ホームページよりお申し込みください（関連→19ページ）。

<税制上の優遇措置>

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

助成応募については、当財団ホームページをご参照ください。

「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

<お問合せ>
地域助け合い基金担当

電話：(03)5470-7751 FAX：(03)5470-7755
メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

- **NEWS & にゅーす**

- **さわやか活動日記**（抄）



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2024年1月1日～1月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人 (53件)

(都道府県別50音順)

北海道	埼玉県	佐生 綾子
沢田 壮兵	新井 章子	下畑 穰治
岩手県	宮本 陶子	杉野 隆宣
島川 敏文	千葉県	鈴木 宏量
宮城県	阿部 美佐子	鈴木 広幸
鈴木 進	菊地 多鶴恵	添田 繁實
藤田 佐和子	小林 雅彦	玉木 康平
渡辺 典子	笹嶋 貢	鳥飼 重和
山形県	重田 百合子	中井 郁子
高橋 寛人	鈴木 章雄	肥口 ふみ枝
茨城県	丹澤 明子	松下 明夫
池ノ上和夫	滑川 里美	柳 久美子
群馬県	松原 尚明	山谷 恵美子
角田 修一	東京部	吉田 信正

吉原 初江

神奈川県

有賀 満雄

川原田 武

小山 俊司

中野 曹一

圓山 賢吾

石川県

安嶋 是晴

岐阜県

河合 峯

静岡県

下郷 宰

原 章

愛知県

森 貞述

京都府

小田 和夫

小田 幸子

橋本 敏子

兵庫県

大森 みのり

島根県

三宅 実

広島県

吉原 寛

福岡県

原口 正夫

宮崎県

青木 淳一

青木 智美

さわやかパートナー法人 (4件)

(50音順)

サントリーフーズ株式会社
株式会社島津製作所
株式会社ニフコ
社会福祉法人隣の会

一般ご寄付 (3件)

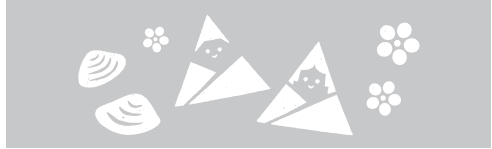
(50音順)

中野 曹一 (2千円)
宮島 都子 (3万円)
匿名希望 (1万8360円)



NEWS

& にゅーす



2023 (令和5) 年度

「連合・愛のカンパ」 助成先が決定しました

立ち上げ支援プロジェクト

さわやか福祉財団では1997年以来、日本労働組合総連合会（連合）よ

り組合員の皆様のカンパ（連合・愛のカンパ）をご提供いただき、地域のふれあい・助け合い活動の団体立ち上げ、新規事業立ち上げを初期運営資金面から支援しています。

今年度も昨年10月10日から11月末まで、当財団ホームページでの告知のほか、全国の社会福祉協議会や各地のNPOセンターにもご協力いただいで募集を行い、33都道府県86団体からご応募いただきました。地域の居場所づくり、子どもや障がい者への支援といった活動を行うとする団体からの応募が目立ちました。また、移動支援、防災活動、外国人支援等の活動を立ち上げた団体からの応募もありました。引き続き、全国の生活支援コーディネーターから推薦を受けた団体の応募も増えていきます。

協議の結果、今年度は18団体に対して総額265万円を支援させて頂いた

くことといたしました。個々の助成先名称と所在地は次ページの通りです。

連合組合員の皆様からは、四半世紀を超える長期間にわたり継続してご支援いただいております。あらためて深く感謝申し上げます。

また、全国で助け合い活動に取り組まれている応募団体の皆様に心より敬意を表しますとともに、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

（内田 信幸）



2023（令和5）年度 「連合・愛のキャンパ」助成18団体

- NPO法人アヴニール（山形県山形市）
- こどもアートでツナグプロジェクト推進チーム（東京都台東区）
- 子ども居場所 若者カフェ「あんちゃんカフェ」（東京都西東京市）
- こよみ（東京都渋谷区）
- なじらね（新潟県柏崎市）
- 子育てシェアCOCO（岐阜県養老町）
- 一般社団法人こども食堂ナナカフェ（岐阜県岐阜市）
- NPO法人愛知こどもホスピスプロジェクト（愛知県名古屋市中区）
- 幸田の子どもの居場所をつくる会（愛知県幸田町）
- ライフサポート嬉野（三重県松阪市）
- はびねすまいる（大阪府大阪市）
- 一般社団法人こたつむり（兵庫県神戸市）
- 甲南げんき村（兵庫県神戸市）
- 高齢社会をよくする女性の会（広島県尾道市）
- ito（愛媛県砥部町）
- NPO法人 Teto Company（大分県竹田市）
- 任意団体地域カフェライフアップ（沖縄県那覇市）
- 大名第二団地『地域の足』移動支援プロジェクトチーム（沖縄県那覇市）

■都道府県別応募と助成状況 ●応募：33都道府県 86団体 ●助成：12都道府県 18団体

都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成
北海道	3		埼玉県	3		静岡県	1		兵庫県	6	2	福岡県	3	
秋田県	1		千葉県	1		岐阜県	4	2	和歌山県	4		大分県	1	1
宮城県	2		東京都	9	3	愛知県	4	2	広島県	2	1	宮崎県	2	
山形県	1	1	神奈川県	3		三重県	3	1	山口県	1		熊本県	2	
茨城県	3		新潟県	2	1	京都府	4		香川県	1		沖縄県	3	2
栃木県	1		石川県	1		大阪府	7	1	高知県	1		合 計	86	18
群馬県	2		山梨県	1		奈良県	2		愛媛県	2	1			

さわやか活動日記(抄)

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SCⅡ生活支援コーディネーター

column

3つの研修をつないで 体制整備から住民主体の活動創出へ 生活支援コーディネーター研修

■福井県 ■担当 共生社会推進リーダー・高橋 望

2回のSC情報交換会

「少し発想を変えられることで自分の町でも実施可能なこともあると感じた」「基本的なことに立ち返って、みんなどで確認することの大切

さを感じた」「もう少し工夫できることはないか考えてみたい」「話し合いの場を充実させたいと感じた」「ニーズをきちんと見極めて、必要な支援を考えていきたい」

これらは、1月22日・若狭町(嶺南地区)、23日・福井市(嶺北地区)で開催された福井県の「生活支援コーディネーター情報交換会」の参加者からの声だ。

情報交換会はSC同士の意見交換と交流によって活動の充実を図ることを目的に、嶺南・嶺北の2地区に分けて実施している。

プログラムは、①現況と次年度事業(案)の説明(福井県)、②各市町の取り組みと今後の展開(意見交換)、③活動創出の具体的プロセス(当財団)、④活動創出についてのグループワーク、で構成される半日(計3時間)のものだ。今回は現場のリアルな実態を伝えるため、岡山県倉敷

市社会福祉協議会の松岡武司氏(元第1層SC)がオンラインで協力した。

意見交換とグループワークでは、発表された内容に加えて事前アンケートの結果も活用した。今回は関心が高かった「協議体を設置したが停滞している」「やらされ感をどう払拭するか」「担い手呼びかけても集まらない」といった項目を取り上げ、特色ある取り組みを行っている地区の報告や、取り組み際のポイントについて情報を出し合った。活動につながる3つの研修

同県ではほかに、昨年7月には新任のSC等を対象に助け合いの意義や取り組み方法等の基本を学ぶSC



福井県 S C 情報交換会の様子（嶺北地区）

初任者研修（全日5時間）を開催した。ここでは、経験年数はあるが再確認したい S C や、別分野からの異動となった自治体職員等の参加もあった。

さらに11月には S C のスキルアップの場として、より実践的な手法を学ぶ S C 全体研修会（全日5時間）を開催。同県大野市第2層 S C ・北澤咲子氏からの事例報告もあり、先進事例だけでなく、身近な地区での取り組みや県内生活

者の反応を聞く機会にもなった。中心となるテーマは、これまで「住民中心の協議体の編成」だったが、第2層協議体設置が進んできたことから「住民主体の活動の創出」へとステップアップしている。

県では、地区の進捗状況や経験年数による理解度の差に対応した「切れ目のない支援」を行うことで地域支援事業の推進に取り組んでいる。

県の伴走支援の取り組み

これらの研修は「地域支援合い生活支援体制整備事業」として開催されているが、ほかにアドバイザーによる相談対応や関係者勉強会、フォーラムや協議体準

備会への講師派遣も行われている。

勉強会は1回ではなかなか成果が出ないため、4回まで活用可能としているのが特徴だ。また、昨今急速に需要が顕在化している移動支援に対応するため「高齢者の外出付添サポート事業」を実施、取り組みのスタートから住民ボランティア団体の立ち上げまでフォローしている。これらは来年度も継続して実施が予定されている。

地域共生社会の実現へ

住民に働きかける各市町の S C や担当職員、関係者の奮闘ぶりはとて頼もしいものだが、それを熱い想いを持って支える県の各種

研修や伴走支援事業は、各地域での共生社会実現に向

けた取り組みの大きな推進力となっている。

協議体や県の取り組みから学んだこと

■ 山梨県 ■ 担当 共生社会推進担当・大方 彩友美

今年度、神奈川県からの研修生として山梨県担当となり、県内のいくつかの市町村にアドバイザー派遣などで訪問させていただいている。山梨県は協議体活動が活発であり、その活動の多様さ、熱心さに感服すると同時に、いくつかの自治体をまわったことで協議体がさらに地域づくりの核になっていくための、大事なことが見えてきたように感じている。

昨年5月、同県南アルプス市社会福祉協議会が実施した社協職員向け勉強会の事例発表。地域でサロンを開催している住民が認知症で困っている人の存在に気づき、地域包括支援センターに連絡して支援につなげ、その後はサロンに誘うなど、工夫しながらその人の暮らしに寄り添い続けている様子が発表されていた。また、地域密着を掲げているデイサービス事業所が、防災訓

練や河川清掃、リハビリ教室といった地域との関わりを通じて協議体から声をかけられ、協議体に参加するようになった例も発表されていた。今では、デイサービス利用者にマルシェの開催などで役割を担ってもらうなど、地域との接点が増えている。「リハビリは面倒でも、地域のためならやる」という利用者もいる一方で、協議体が地域づくりに関わる住民をさらに取り込んでいく大きな輪になっている様子が見えた。

このことから、意志ある協議体メンバーは、まず、助けを必要とする人の具体的なニーズを知り、その人のためにどう連携して支援ができるか、特技や地域に信頼されている協議体メンバーが話し合っていくと新しいアイデアが生まれ、ワクワクできる仕組みや活動が生まれていくように感じた。

充て職で組織し、具体的なやるべきことや何のために取り組むのかが見えず、活動が停滞してしまいがちな協議体もあるようだ。また、協議体の活動は地域性もさまざまであることから、「これをやればうまくいく」というような明確な答えはない。しかしそれぞれが地域の誰かを思い、行動することで経験が積み重なり、安心して暮らせる地域につながっていくものと思う。

また、SCをサポートするための山梨県の研修や情

報交換会も、どうしたら良い活動につながる気づきを得て視野を広げてもらえるか、毎度工夫が凝らされている。例えばグループワークのテーマでは、「住民の様々なニーズに対して、助け合い活動を創出すること」で解決するためには、誰に協力してもらい、どのよう

に働きかけていけばよいのか」「2層の協議体構成員を適切にどう選出すればよいか。2層の圏域を決めるポイントは」といった、SCが活動を進める中でぶつかるであろう課題を具体的に提起している。県がアドバイザー派遣などで市町村の取り組み支援から得た知

見や課題を基に研修内容を検討し、SC同士も情報交換でさまざまな知恵を出し合いながら成長していく良いサイクルになっているようだ。

ある。今、目の前で困っている誰かに、地域の力でどうやって手を差し伸べられるか、具体的に考え、知恵を出し合い、行動する。その繰り返し地域の働きかけに丁寧に取り組む、山梨県各自治体の住民主体の取り組みに今後も注目していきたい。

各地・各事業の取り組みをご紹介します

SC養成・スキルアップ研修会（応用編）開催 情報共有によるSCのスキルアップ図る

■山梨県

【1月18日】山梨県主催

「令和5年度 SC養成・スキルアップ研修会（応用編）」が開催され、当財団

も協力した。参加者23名。

本研修会は、今年度市民フォーラムを開催した自治体にフォーカスしてその



取り組みを紹介してもらい、全県に広めていくことを狙いとして実施された。冒頭、県健康長寿推進課の佐藤亨総括課長補佐より、生活支援体制整備事業の意義と、人口減少時代に即した安心できる暮らしが持続可能なものとして実現することを期待したい、と話があった。

次に財団・鶴山が「住民主体の活動を広げていくための仕掛けについて」と題して講演。取り組んできたことには何も無駄はなく、ぶつかった壁をどう乗り越えていくかを皆で話し合い、取り組みごとが地域づくりである。また、主役は住民であるとし、高齢者等住民

がやりたい活動を適切に選択できるようになる」とよいと話した。

事例発表では、南アルプス市第1層SC斉藤節子氏が「南アルプス市のフォーラムの経緯」を発表。コロナ禍でも諦めずに活動を続けたこと、仕掛ける側の本気度が伝われば住民から住民に熱が伝わっていくこと、本気度が伝わる場を何度も設けることの大切さを説いた。同市第2層SC小林陽一氏は「協議体に関わるメリット」を発表。協議体は、地域課題の1次的受け皿としての機能や、課題が活動につながらなくても住民の意識が変わっていくきっかけにもなるとのこと。第1層協議体のコアメンバーで

ある金丸清人氏は、これまでの約10年間の取り組みを紹介し、協議体への参加が人と地域を変えていくことを伝えていた。

パネルディスカッションでは、「支えあいフォーラムについて考える」と題し、同県内の北杜市、韮崎市、市川三郷町の3自治体の担当者が登壇し、それぞれ開催概要について発表。鶴山の進行で、会場との質疑応答形式で周知やフォーラム後の勉強会など仕掛けの方法やポイントを共有した。

苦勞した点について韮崎市は、来場者数が当日まで分からなかったことや、住民を交えた週1回の寸劇練習を挙げた。北杜市は、苦勞ではないが、開催に向け

た企画、周知、運営など何もかも手探りだったが、住民の反応を感じ、やってよかったと実感していると話した。市川三郷町は、市・市社協・有志のワーキンググループの協働で開催されたフォーラムで、関わる人が増えたことで合意を得ながら進めることができ、何を目指しているのか明確にできてよかったと話した。

ワーキンググループは、昨年度に職員向け勉強会を2回実施し、有志30人以上が住民主体の地域づくりを推進するために



山梨県SC養成・スキルアップ研修会の様子

立ち上げられたもので、地域課題を検討する場になっているとのこと。

グループワークのテーマは2つ。

① 支え合い活動を広げ協力を増やすため、フォーラムを開催する。準備を進める上でのポイントや検討すべき事項をクリアするための取り組みについて。

これに対し、広報・周知内容、対象者、合併したところはエリアごとに分けて開催、住民をいかに巻き込むかの検討、関係者間での共通理解の醸成、関係者間での目標設定、等の方法を共有した。

② フォーラム開催後、アンケートに記名した3割ほどの住民をどう生かすか。

また、取り組む上でのポイントは何か。

発表では、目指す将来像を確認する、期間をあげない、男女の参加動機の違いを考慮する、勉強会で参加者の思いを放出してもらう、あえて準備しすぎず住民主体で取り組んでいくようにする、等の意見があった。

最後に鶴山から「今日のグループワークのメンバー同士、名刺交換して今後の関係づくりにつなげてほしい。仕掛けを続けていくことの必要性、地域に必ずいる本気の住民をぜひ見つけてほしい」と伝えた。

(鶴山 芳子、大方 彩友美)



居場所視察

取り組みと活動者の声を情報収集

■高崎市（群馬県）

【1月16日】高崎市第1層SCの居場所視察に同行した。

片岡地区「居場所あかり」

は協議体の話し合いの中から、空き事務所を活用して「まずはやってみよう」と始まったモデルとなっている居場所。元民生委員やボランティア活動をしている元保育士など、協議体メンバーを中心に活動している。この日はスタッフ含め11人が参加していた。「人数は少なくても、小さな活動を増やすことが必要。大きな道を渡るのが大変だったり、遠いから行けなかったりと、

現存する居場所に行くことが難しい人でも参加できるようにしていきたい」とのことだった。

活動開始から6年の「八起き」（共生型常設型居場所）は、この日17人が参加していた。代表者（第1層・第2層協議体メンバー）は、「地域活動で大切なのは、俺が俺の『が』を捨てて、おかげの『げ』で生きるをモットーにやること。お互い様の精神で楽しくやるのが大切」と話していた。スタッフからは「体調を考えながらできることをしている。活動は初めから



軌道に乗ったのではなく、参加者に合わせて時間などを変更してきた。頼られるからやっている。最初から張り切らない、来てくださる方に強制しない、参加者に深入りしない。そして何より楽しく笑って過ごせるのが良い」と話があった。参加者は男性も多く皆楽しそうで、輪が広がっていることが感じられた。

「コミュニティカフェ一体さん」（共生型常設型居場所・本誌2020年5月号掲載）は、この日15人が参加していた。この町内では、生活支援体制整備事業が始まる前から集会場でサロン等を開催していた。事業が始まってからは、町内の住民だけでなく高崎市の誰も

が集える居場所として市の居場所運営事業補助金を活用し、「コミュニティカフェ」という名称で17年から週1回火曜日に開催。代表者（第1層協議体メンバー）は、「もう年だから」と言わず、元気で皆楽しく過ごせて、老後が怖くならないように」と話していた。ここからお助け隊等の活動にも派生している。

居場所には笑顔と思いやりがあふれていた。人と人とのつながりを大切にしながら互助の活動は、地道に行うことが大切だと強く認識する機会にもなった。

（三浦 里沙）



情報・調査事業

調査政策提言プロジェクト

厚生労働省 地域づくり加速化事業 第2回運営委員会に出席

〔1月10日〕厚生労働省

「地域づくり加速化事業 第2回運営委員会」がオンラインで開催され、出席した。

今年度、この事業の伴走支援は全国48地域で開催されており、報告は、①伴走支援中間報告（48市町村の支援について資料を共有し、そのうちいくつかの市町村について報告）、②アドバイザーミーティングの報告、③ブロック別研修の実施状況について（事務局より）。続いてこの日の論点とし

て、①事業評価（次年度に向けて）、②伴走支援にあたっての課題、について大坂純委員長（東北こども福祉専門学院副学院長）の進行で議論した。伴走支援3回のうち、この時期、各地で2回程度支援が実施されているが、さまざまな課題が挙がっている。それらを共有し、解決するための議論を行った。

地域づくりは1年で大きな成果が得られるものではなく、中長期にわたる視点が重要である。国、厚生局、



都道府県、アドバイザーのチームによる市町村支援の有効性を共有し、市町村内での各担当課、専門職、社

協、事業所、住民も含めたさまざまな立場の人たちがチームになり、中長期にわたる地域づくりを目指しながら事業を推進していくことを共有できたと思う。今後に向けて、厚生局の役割やスーパードバイザーの必要性等の意見も出された。評価については、市町村に分かりやすい評価であること、また、支援チーム側の評価の必要性についても意見が出されるなど、より良い事業と成果につながる活発な議論となった。

この事業の伴走支援により、それぞれの地域での課

題を解決するさまざまなノウハウが生まれていることも、全国の取り組みに生か

地域ケア会議と生活支援コーディネーターの協働に関する調査研究事業に出席

〔1月22日〕「令和5年度老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）地域ケア会議と生活支援コーディネーターの協働に関する調査研究事業」の第3回検討委員会がオンラインで開催され、出席した。

委員からの情報共有として、大田秀隆委員（秋田大学高齢者医療先端研究センター教授）から秋田県での職種連携によるフレイル予防の取り組みなどについて、

せるとよいのではと感じた。
（鶴山 芳子）

ットと報告書について意見交換を行った。活発に議論されたのは、リーフレットにある地域ケア会議と生活支援体制整備事業の関係整理の図解について。

当財団からは、「体制整備事業は、フレイル予防やフレイル対策だけでなく、高齢者を中心としながらも、赤ちゃんから高齢者まで、障がいの有無にかかわらず誰もが暮らす地域づくりを推進していくものである。それにより高齢者の役割と

次は、事業進捗状況の報告として、①ワークシヨップの開催に関して、②リーフレットの作成に関して、③報告書とりまとめに関して事務局より説明があり、特に成果物となるリーフレ

出番を生み出し、結果的にフレイル予防をはじめさまざまな効果を及ぼす。そのことを前提に、地域ケア会議での具体的課題がSCや協議体につながり、共に地域づくりを推進していける

よくなれば」と意見を述べた。

後藤委員長からは、「S Cや認知症地域支援推進員の地域ケア会議への参加は今後、必須ではないか。今回は、地域ケア会議をより良く運営していくことを中心にS Cとの連携を考えた委員会であったが、次年度以降に生活支援体制整備のノウハウを拾い上げていき

たい」との発言があった。

全国的にも人口減少が著しい東北地方では、高齢化率も高い。家族機能も弱くなっている。住民が「住み慣れた地域で暮らし続ける」ために、課題の検討と政策の検討が連動するよう議論した。リーフレットと報告書が各地の取り組みに生かされるとうれしい。

(鶴山 芳子)

社会参加推進事業

社会人地域共生活動参加推進プロジェクト

「シニア活躍推進研究会」に参加 清水理事長が講演

【1月17・18日】17日に東京、18日に大阪で開催された、一般社団法人定年後研

究所主催「シニア活躍推進研究会」で当財団の清水肇子理事長が講演し、玉置は

オブザーバーとして東京会場に参加した。参加者は、大手企業の人事部および関係部署担当者の皆さんで、両会場同じ内容で実施された。

第1部は、「改正高年齢者雇用安定法への対応状況及び企業に期待すること」と題した厚生労働省職業安定局高年齢者雇用対策課長・宿里明宏氏の講演と、「社会貢献活動での気づきを通じた企業人材の育成」と題した清水理事長の講演。

宿里氏は、ニーズの多様化を踏まえて高年齢者がモチベーションを維持し、活躍の場を広げるためにも、

令和3年4月1日施行「改正高年齢者雇用安定法」の業務委託や社会貢献活動な

ど「創業支援等措置」を選択肢として積極的に検討してほしいと話した。

清水理事長は、人生100年時代を迎え、地域共生社会は多様性と主体的な参加がキーワードであるとして、社員が地域と関わり社会貢献活動を通じて成長するための支援を企業として行う意義や、70歳までの就業確保に向けて地域活動団体と連携する効果等について話した。その上で、当財団を含む非営利法人など数団体の企業出向者受け入れを提案した。

第2部は、参加者を数名ずつのグループに分けて分科会が行われた。「60歳以上社員一層の活躍に向けて『人材開発の視点から』」

をテーマに、各社のシニア世代のキャリア支援の課題や取り組むべき方向性を自由討議で共有した。高年齢者の雇用はニーズの多様化とモチベーションが各社共通の課題であり、人事制度や研修内容改定を検討している担当者同士、熱心な議論が交わされていた。今回の研究会の大きな柱でもあった

事務所 だより

●今年度も1年間、研修生2人が財団の活動に尽力してくれた。これまで経験のない分野でひたむきに取り組む姿は、財団職員にも大いに刺激になった。お疲れ様でした！元の職場に戻っても、財団での経験を生かして頑張ってくださいね。

「創業支援等措置」

としての地域社会参加へのスムーズな移行は、企業・社員・地域の「三方よし」となる重要なポイントだとあらためて実感した。今後の社会参加推進事業につなげていきたい。

(玉置 英明)



能登半島地震におけるさわやかインストラクターの近況

石川県のさわやかインストラクターお二人の近況をお伝えする。

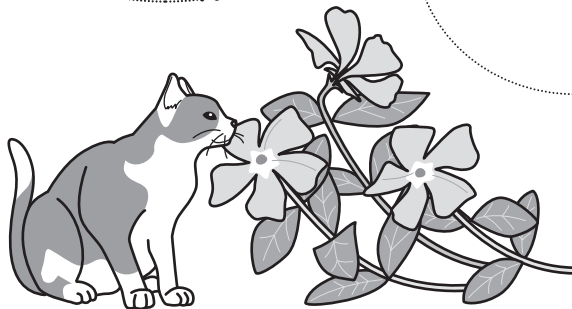
「キャンナスわじま」として活躍されている中村悦子さんは、ご自宅が全壊するという大変な被害を受けながらも、発災直後から、オレンジグループ、全国のキャンナスの皆さん、株式会社ぐるんどビーをはじめとするさまざまな団体と連携し、福祉避難所での支援活動に尽力されている。仮設住宅が建ち始め、避難所閉鎖の声が聞こえてくる中、金沢市などへ2次避難している住民の声も聴きながら、次の展開に向けて動き出している。能登町や穴水町など医療の被害も大きかった地域で、在宅医療を推進する取り組みに向けてさまざまな人たちとの話し合いも始めている。「軌道に乗ったら応援してほしい」とのお話だった。

白山市で「NPO法人プープ」を運営している吉村久美子さんは、能登半島から離れてはいるものの、親戚やスタッフなど大きな被害を受けた人が多い中、どう支援できるか1月末に珠洲市に足を運び、また、つながりのある七尾市の高校に支援の働きかけなどを始めている。能登半島へ向かう「のと里山海道」は片側通行の区間もあり、往復12時間かかるという状況の中、次の訪問を計画しながらコミュニティ再生等の支援に向けて動き出している。

当財団も「地域助け合い基金」の特別対応等を通じて支援していく。ご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

(鶴山 芳子)

みんなのひろ場



投稿募集

『さあ、言おう』では、皆様のご意見や情報をお待ちしています。掲載記事へのご感想、地域の助け合い活動や居場所の情報、日頃気になっているテーマ、いきがい、社会参加などなど、ぜひお寄せください！

送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX: (03) 5470-7755
E-mail:
pr@sawayakazaidan.or.jp

※付属のハガキや投稿用紙も
どうぞご利用ください。

村田幸子さんの連載を楽しみにしております。長年、福祉の課題を発信してこられた方が、施設の内側から届けてくださる見方、生き方は、とてもうれしいです。
社会からの疎外感や、老いを一括

エッセイに
思い当たることばかり
河合さん
岐阜県

「好評いただいた村田さんのエッセイは、今月号をもって終了となりました。いずれまた、何かの機会にお届けできればとも考えています。ぜひ河合様の日々の暮らしでのお考えなどもお寄せください。」

りに捉えることなど、思い当たることばかりです。ありがとうございます。
どうぞお元気にとお祈りしております。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856*

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

*払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵から はり絵・池田げんえい

「春夢」日南(宮崎)



編集後記 ●生活支援体制整備事業に先進的に取り組んできた岡山県倉敷市。中島地区で多彩な活動が広がっています(P4～「活動の現場から」)。●「子どもと一緒に地域で輝こう」は、外国籍の子どもたちを地域であたたかく見守る活動です(P11～)。●「連合・愛のカンパ」の助成先が決定しました(P27～「NEWS & にゅーす」)。●村田幸子さんのエッセイ「老いの暮らしを創る」が最終回となりました。これまで、楽しく示唆に富むお話をありがとうございました(P20～)。●『さあ、やろう』vol.24が発行となりました(裏表紙)。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

丹
直秀

「他人事」と「自分事」

青春時代を富山県で過ごし、

能登・北陸の震災は他人事と思えない

年齢が88歳を越え、高齢者問題はいま

まさに自分事となっている

防災も福祉も、

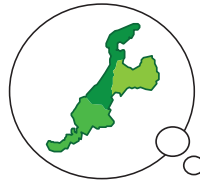
自分事として取り組もうとよく言われるが

これがなかなか難しい

他人事を自分事にするには

まず、自分事を掘り下げて考えてみることに

そこが基本かもしれない



●公益財団法人さわやか福祉財団理事

60歳で企業をリタイアし、さわやか福祉財団にボランティア参加して以来28年。日本で、そして自分の地域で「新しいふれあい社会」を実現したい思いは募るばかりです。

さわやか 3月号

通巻367号 2024年3月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
取材協力 七七舎
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団

〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階

Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755

E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp

<https://www.sawayakazaidan.or.jp>

Printed in Japan

助け合いの仕組みづくりをさらに進めよう

情報紙

『さあ、やろう』 vol.24 発行!

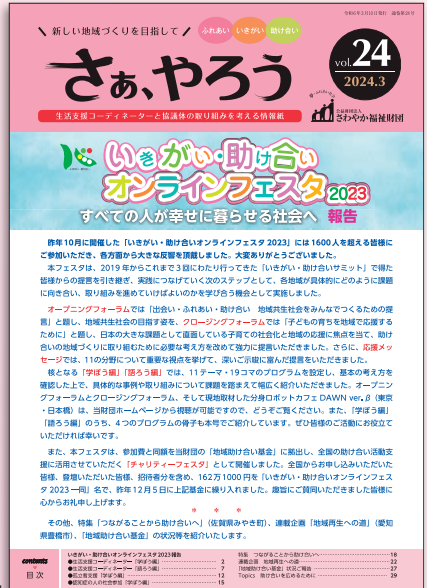
生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを考える情報紙『さあ、やろう』。

地域支援事業に携わり、地域における助け合いの仕組みづくりを進めている方々の参考となる記事を掲載し、全国の関係者の皆さんに頒布しています。また、財団ホームページからダウンロードもできます。

【vol.24目次】

- ◆いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023報告
 - *生活支援コーディネーター「学ぼう編」
 - *生活支援コーディネーター「語ろう編」
 - *孤立者支援「学ぼう編」
 - *認知症の人の社会参加「学ぼう編」
- ◆特集 つながることから助け合いへ（佐賀県みやき町）
- ◆連載企画 地域再生への道（愛知県豊橋市「トヨッキー基金」）
- ◆「地域助け合い基金」状況で報告
- ◆Topics 助け合いを広めるために

財団HPトップページ→「ライブラリー」→「さあ、言おう・さあ、やろう」にお進みください



vol.22

vol.24

【お問合せ】メール post@sawayakazaidan.or.jp
電話 (03) 5470-7751